

遺跡発表 1. 四街道市

ひがしさく 東作遺跡

—外縁部から城の本体を探る—

嘱託調査研究員 塚田 清啓

遺跡の概要

東作遺跡は四街道市中台字東作に所在し、鹿島川とその支流によって開析された標高約 29mの台地上に立地する。本遺跡は縄文時代から近世に至る複合遺跡であるが、特に、土塁・空堀などの中世城館跡に関する遺構を含む遺跡として知られ、別名“中台城跡”とも呼ばれる。城本体には高さ約 3~4mの土塁が方形に廻り、南隅で出升形に折れて切れ、虎口を設けている。また、土塁の内部が外側の地表面より約 1m低く削平されていることも特徴である。この方形に区画された土塁の北西側には二重の土塁・空堀が廻り、やや離れた東側や南西側にも土塁や空堀が存在する。そして、土塁の外側では、台地整形が行われた形跡も確認されていたことから、本遺跡の城館跡は空間を複数に区画するいわゆる“複郭構造”をもつ可能性があると考えられてきた。

周辺の遺跡

本遺跡の周辺には、鹿渡^{しかわたし}城跡、池ノ尻館跡、東作城跡(東作遺跡)、大山砦跡、東向井城跡、中野戸崎砦跡など多くの中近世城館跡が存在する。特に四街道市の城館跡の特徴として、単独の方形土塁を基本としたいわゆる“単郭構造”をもつものが多く、池ノ尻館跡などは代表的である。本遺跡の城中心部のみを比較したとき、規模や形態の点で類似する。

この“単郭構造”をもつ城館跡の時期はおおよそ中世中頃に位置付けられている。しかし、中世後半に使用されている城館跡も認められている事例もある。後述するが、実際本遺跡においても土塁・空堀等の遺構は中世の様相を示すのに対し、出土遺物の大半は近世のものが多いという事実がある。こうしたことは、本遺跡の性格や時間的位置付けにあつ

て重要であり、“単郭構造”か“複郭構造”かといったことが問題の一つとして挙げられよう。

そうしたなかで、本遺跡は道路や工場により一部台地と遺構が削平されていたものの、ほぼ当時の景観を保っていると考えられる。

調査状況

本遺跡の発掘調査は平成 22 年から開始され、これまでに 4 回実施されている。そのうち第 2 次調査のみ四街道市教育委員会において実施され、他は当センターが行っている。調査の対象となった場所は、現況道路に沿った範囲で城本体の外縁部であり、城に関連する遺構・遺物が存在すると予想された。

第 1 次調査は、平成 22 年 12 月~平成 23 年 3 月の期間において 2,495 m²の範囲を対象に調査した。この調査では、大型溝状遺構 2 条、台地整形区画 2 ヶ所、土坑墓・火葬土坑・柱穴・地下式坑・井戸等を多数検出した。遺物は、中世から近世にかけての陶磁器・瓦質土器・土師質土器・かわらけ・石製品・鉄製品・銭貨・煙管^{きせる}などが出土した。中世遺物には青磁、瀬戸美濃産の天目茶碗・平碗、常滑甕、五輪塔・永楽通寶などがある。遺物の量的には、中世と近世が半々であった。

第 2 次調査は、平成 23 年 5 月に 1,556.09 m²の範囲を対象に実施された。対象範囲のうち本調査が行われた 129 m²では、掘立柱建物跡 2 棟、土坑 6 基が検出され、陶磁器、砥石、鉄製品、銅製品、銭貨が見つまっている。遺物は主に近世が主体である。

第 3 次調査は、平成 24 年 1 月~3 月の期間で 835 m²の範囲を対象に調査を行った。調査の結果、台地整形区画 3 ヶ所、地下式坑や井戸といった深い土坑が第 1 次調査と比べて多く検出された。また、非常

に多くの柱穴が混在する柱穴群が検出され、数回にわたり建て替えが行われた様子が窺える。なお、墓に関連する土坑は検出されなかった。出土遺物は近世のものが主体で占められる。

平成24年5月より実施の第4次調査では、2,928㎡の範囲を調査している。遺構は台地整形区画3ヶ所、井戸、溝状遺構、土坑墓群などが検出されている。遺物は近世や近現代のものが多く見つかるが、板碑や永楽通寶といった中世のものも出土している。

土塁と大型溝状遺構の配置関係

まず、城郭研究の視点から第1次調査で調査した土塁2条と大型溝状遺構2条の配置関係についてみておく。現道に直交して位置する土塁(1)と大型溝(1)は、当初より一連の遺構として捉えられ、方形土塁と同時期に存在し、大型溝は“堀”として機能していたと考えていた。また、現地形では確認できなかった2条の土塁(1)・(2)の下から大型溝(2)が検出された。通常“堀”には土塁を伴うのが一般的であるが、大型溝(2)には土塁を伴った形跡が無く、完全に埋められた後に土塁(1)・(2)あるいは大型溝(1)が構築された時間的順序となる。このことは、何らかの社会背景の影響により、本来機能していた大型溝(2)とそれに伴う土塁は改築され、土塁(1)・(2)と大型溝(1)がつくられたことがいえる。

ただし、大型溝(2)に土塁が伴っていたのかは明確ではなく、城中心以外の空間を囲う配置でもないため確実に城郭構造の一部とは言えないかもしれない。

台地整形区画の様相

本遺跡において台地整形が頻繁に行われていることは、調査状況でも触れたとおりである。そして、台地整形区画内は、ある一定の意図を垣間見ることができる。具体的には、掘立柱建物跡で占められる区域と土坑墓や火葬土坑で占められる点である。前者は居住域を形成し、後者は墓域を形成して両者が混じることはない。空間の役割が明確に区別されている。おそらくは城に関係する人物が居住し、弔われていると考えられる。

単郭？複郭？

城郭研究では、城の構造を理解する場合、外敵に対する防御機能を重視する。つまり、堀や土塁が外敵の障害となりうるかどうかである。本遺跡の場合、城の中心である方形土塁はそれ自体で一度完結している。土塁の高さも3~4m程あることから、ある程度必要十分な条件を満たしていると思われる。したがって、少なくとも単郭構造をとることはまず認められるところであろう。

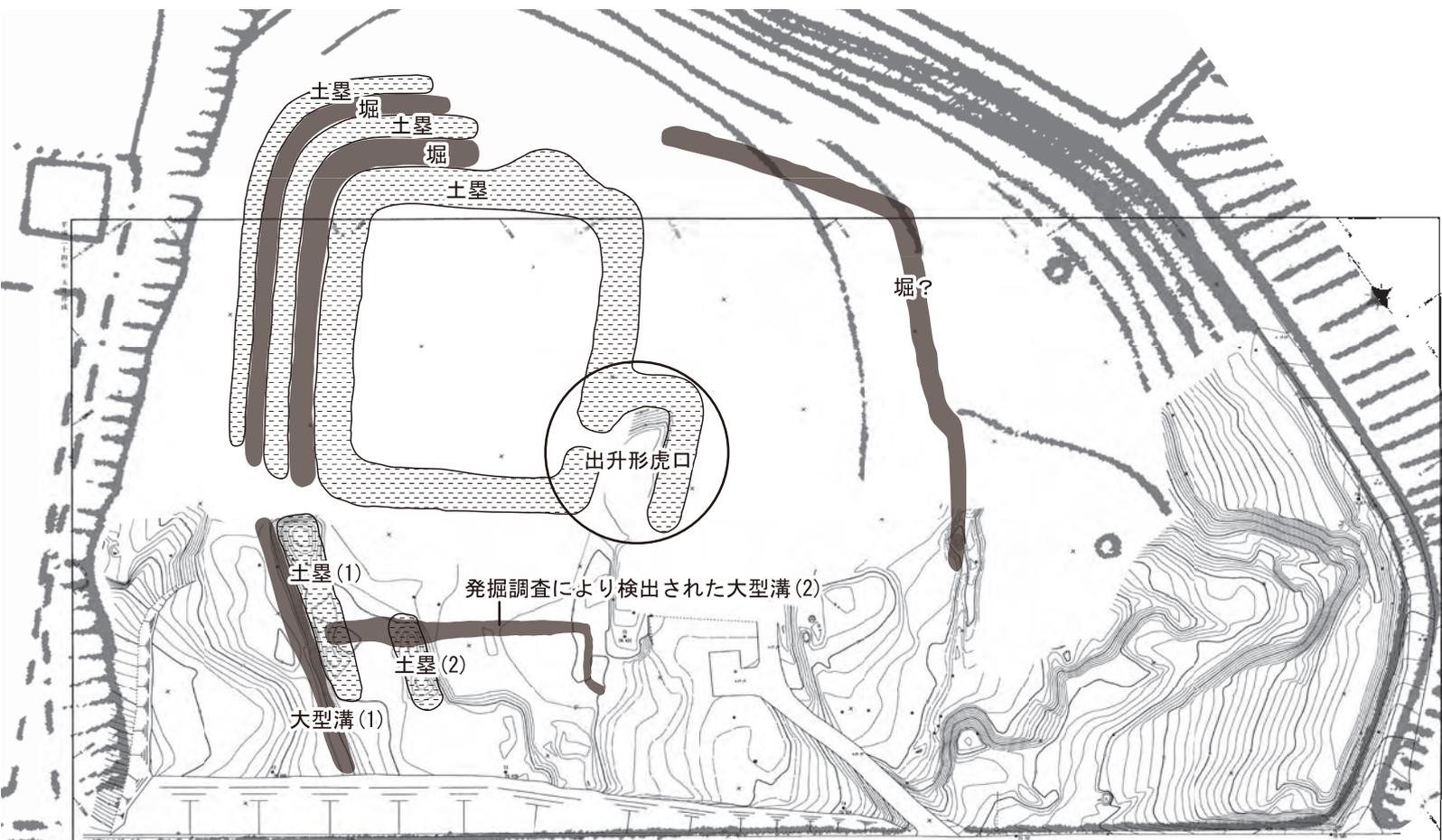
では複郭の場合はどうだろうか。それには先述した第1次調査区内の土塁と大型溝の解釈がやはり肝要である。防御機能を前提とした場合、堀や土塁で多様な空間を囲う必要がある。現道に直交する土塁(1)・大型溝(1)は防御性が高いと捉えられるが、反対の南西側には遮蔽施設がほとんどなく防御が弱い。大型溝(2)も、幅の狭い南東側では子供でも飛び越えられよう。一方、墓域や居住域においても防御性の強い土塁あるいは堀等によって、各区域全体を囲われていない。したがって、複郭構造を現段階で採用するには状況が不十分と言わざるを得ないだろう。

まとめ

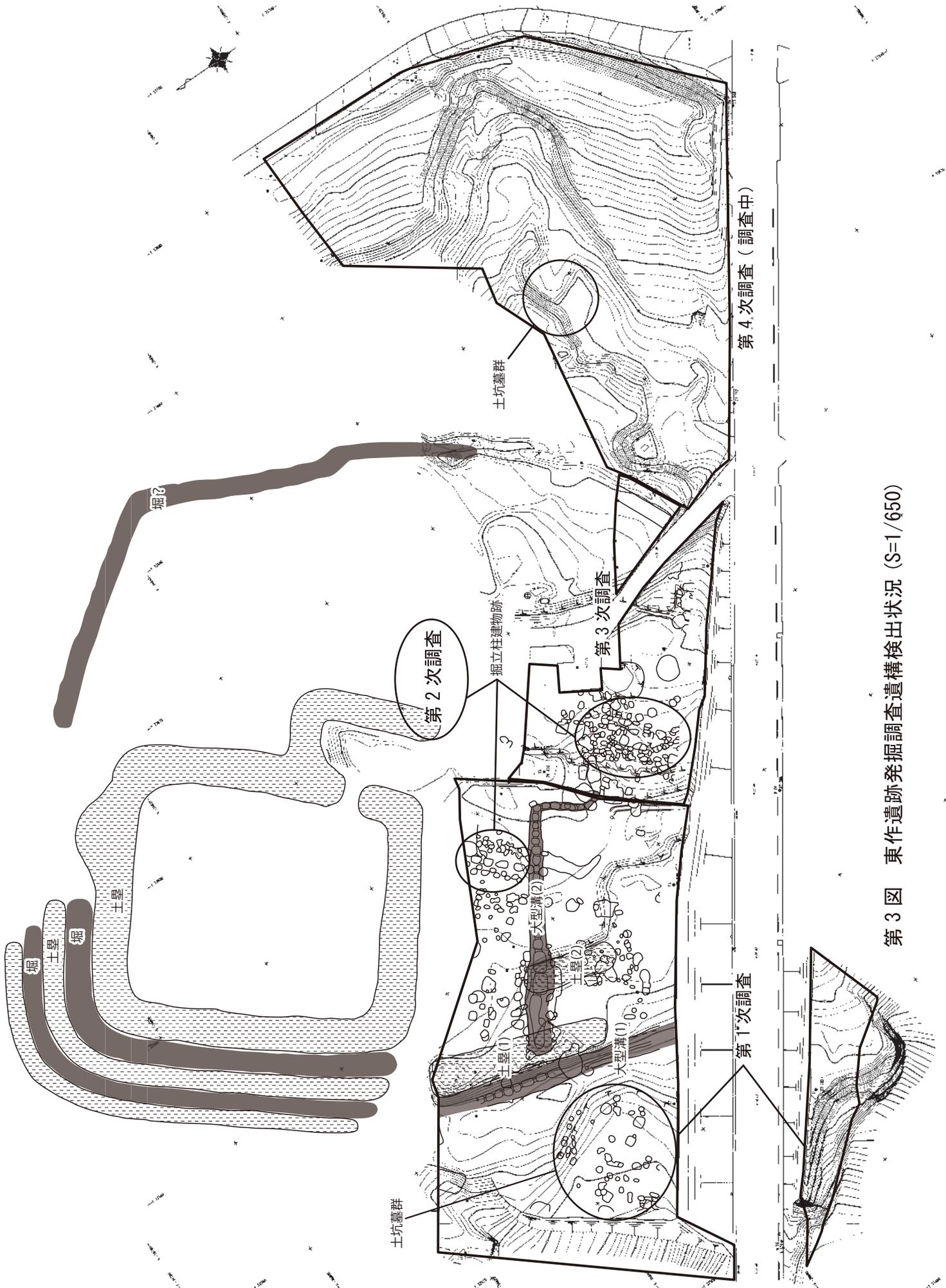
以上、東作遺跡の城館跡の性格について若干の考察を試みてきた。遺構の遺物は、中世の様相を示すものが検出されるものの、総体的な数量では近世のものが圧倒的に多く出土する。また、遺構の形態的特徴も近世を示すものが多く存在することから、中世以降も継続的に居住されていたと考えられる。中世の頃につくられた遺構は、近世の頃に再利用されていた可能性もあるため中世の様相は薄い。しかし、大型溝や土塁を築造し、台地整形を行い居住域や墓域を台地縁辺部にまで配置するなどの中世の様相もみられ、台地全体を利用していることが理解された。そして、単郭構造をとる城館跡であるとの結論に至った。ただし、それでも第1次調査区内の堀(2)の存在を蔑にはできないのが本音である。調査は一端終了することとなるが、今後も注目すべき重要な遺跡であると考えている。引き続き行われる整理作業によって詳細な検討を加え、歴史的背景も踏まえて本遺跡の性格を考えていきたい。



第1図 東作遺跡と周辺の中近世城館跡遺跡(1/25,000を75%縮小して使用)



第2図 東作遺跡の地形と縄張り図(1/1000)



第3図 東作遺跡発掘調査遺構検出状況 (S=1/650)



第1次調査 空撮状況



第1次調査 大型溝(1)



第3次調査 空撮状況



第1次調査 大型溝(2)



第4次調査 土坑墓群